

「若い頃に比べ年をとってくると、一年の経過^{けいか}がとても早く感じられる」という話をよく耳にします。同じ人であっても、年齢によって時間の過ぎ去るスピードは実感としては異なるようです。

動物生理学者、本川^{もとかわたつお}達雄さんの著書『ゾウの時間 ネズミの時間』によると、自然界では動物それぞれが異なる時間の世界を生きているといます。その動物の生きている時間感覚は、体重の四分の一^{じゅう}乗にほぼ比例します。この計算によると、例えば体重三十グラムのネズミは三トンのゾウのおよそ十八倍、六十キログラムの人間のおよそ七倍速い時間感覚で生きていることになります。逆を言えば、体が大きくなるにつれて時間の経過速度は遅くなっていくとも言えます。従って、私たち人間が捉えている時間感覚は、実はかなり主観的で、相対的なものだと言えるでしょう。

道元^{どうげん}禅師は『正法眼蔵』「有時^{うじ}（うじ）」の巻で、独特の時間論を展開しています。「有時^{うじ}」は“有”^あるという字に“時”と書きます。この「有る」は“存在”^{うじ いちご}のことで、特に私たち人間に焦点を当てています。「有時^{うじ}」と一語にしたのは、この自分を^ぬ抜きにして時は存在し得ないということ表現しようとしたからです。

その中で道元禅師は、「時^{とき}はひとりでに過ぎ去っていくものだと考えてはならない」とお示しになっています。また「一瞬一瞬に私たちは自分という存在^{すべ}を滑り込ませつつ時は生み出されていくものである」とも示されています。

何かに熱中してあっという間に過ぎていった時間も、ボーッと過ごしてしまった時間も、全て自分という存在と無関係ではあり得ないということです。だとすれば、自分がどう時間と向き合うかが大切になってきます。道元禅師はそれを「この自分という存在と一体の時間を生きる今」とはどうあるべきかと私たちに問いかけてくるのです。今、この時間としっかりと向き合いつつ生きる時、その人にとっての時間とは、単に一方向に過ぎ行く流れ^ゆではなく、前方にも後方にも、左右にも上下にも、さまざまな広がりを持って展開されていくものとなるのです。

私たちは日々、一人一人さまざまな時間を生きていますが、後になって振り返ってみると、その時間の使い方に反省しきりということも多いのではないのでしょうか。しかしもし今日この瞬間から自覚的に、主体的に時間を生き始めることが出来れば、

『禅のこころ-曹洞宗-』

その時間は単に自分一人のために流れ去って行く時間ではなくなり、さまざまな人や物と繋がり、広がりを持ち始めるようになるのです。それこそが道元禅師のお伝えになった仏ぶつ法ぽうに裏打ちされた生き方としての「有う時じ」であり、そこにはお釈迦さまと同じ歩みが重ね合わされているのです。

— 終 —